

03

大会概要(案)のポイント

これまでの経緯

- 2014年11月** ○…… 市議会が2026年冬季オリンピック・パラリンピックの札幌招致に関する決議を可決。市長が2026年冬季オリンピック・パラリンピックの招致を表明。
- 2016年11月** ○…… 日本オリンピック委員会(JOC)に対し、開催提案書を提出し、計画を公表。
- 2017年11月** ○…… 開催地に立候補するにあたり、国際オリンピック委員会(IOC)との対話ステージに参加。対話ステージではIOCから様々な指摘や助言がなされた。※下記参照
- 2018年9月** ○…… 北海道胆振東部地震の影響、札幌駅周辺のまちづくりの状況や北海道新幹線の札幌延伸を踏まえ、2026年大会に向けた招致活動を終了し、2030年大会へ向けて活動を継続。
- 2020年1月** ○…… JOC理事会において、札幌市が2030年冬季オリンピックの国内候補地に決定。
- 現在** ○…… これまでの招致活動や市民との対話を踏まえ、大会計画を見直し。

計画の更新

❄ 開催提案書の公表【2016年11月】

札幌で冬季オリンピック・パラリンピックを開催した場合、どのような大会にするのかを記載した開催提案書を作成し、JOCへ提出するとともに、その計画の内容を公表しました。

❄ 対話ステージへの参加【2017年11月】

IOCから、まちづくりと連動しながらも、次世代に過度な負担を残すことのない計画とするよう、指摘・助言を受けました。

❄ 市民対話事業の実施【2019年9月～10月】

これまでの指摘・助言を踏まえた計画の変更点をお示しし、大会招致に対する市民の皆さまの期待・懸念を把握するワークショップや、これらのご意見を振り返るシンポジウムを開催しました。

❄ 東京2020大会の1年延期、無観客開催【2021年7月～9月】

新型コロナウイルスの影響により、東京2020大会は史上初めて1年延期して実施された大会となり、ほとんどの会場で無観客で開催されました。

持続可能なオリンピック・パラリンピックとはどうあるべきかについて、改めて検討を行い、**これまでの計画を見直しました。**



大会概要(案)のポイント

❄️ Point 1 経費の精査

》 27ページ、28ページ

大会の実施に支障がない範囲で経費を縮減しました。

大会運営費には、従前の冬季大会よりも多くの割合で予備費を計上し、リスクへの備えを強化しました。

大会運営費は、IOCの負担金やスポンサー収入等の民間資金でまかない、原則、税金は投入しない計画としました。

大会に関連する経費の削減額

※2019.7.29冬季オリンピック・パラリンピック招致調査特別委員会公表時との比較



❄️ Point 2 大会を開催する意義やもたらされるレガシーの再構築

》 3~12ページ

昨今の社会情勢の変化を踏まえ、大会の開催が将来のまちづくりに貢献するものとなるよう、大会によって促進される4つの分野(「スポーツ・健康」「経済・まちづくり」「社会」「環境」)ごとに意義やレガシーを再構築しました。

❄️ Point 3 既存施設を最大限活用した施設配置

》 19~25ページ

すでに使われている施設を最大限活用し、大会のためだけの新しい施設は設けない計画としました。

自然環境の保全を重視し、会場整備における樹木の伐採等は、競技に必要な最小限の範囲でのみ行うこととしました。

オリンピック・パラリンピックが 私たちの心にもたらすもの

札幌で行われた東京2020オリンピックの陸上男子マラソンでは、オランダのアブディ・ナゲーエ選手が銀メダル、ベルギーのバシル・アブディ選手が銅メダルを獲得しました。2人はソマリア出身ですが、内戦により祖国を離れ、難民としてそれぞれ違う国から出場していました。

ゴール直前、バシル・アブディ選手は先を走るアブディ・ナゲーエ選手からの、手招きと励まされるようなしぐさに応え、3位争いから抜け出し、見事メダルを獲得しました。困難を乗り越え栄光を手にした2人の姿に、世界中が感動しました。



東京2020パラリンピックの自転車ロード女子タイムトライアルでは、杉浦 佳子選手が日本のパラリンピック史上最年長の50歳で金メダルを獲得しました。

金メダル獲得後の「最年少記録は二度と作れないけど、最年長記録はまた作れますね」という言葉は、パラアスリートの不屈の精神を象徴するとともに、さらなる高みを目指して挑戦し続ける姿が、多くの人の心を動かしました。

平昌2018大会のスピードスケート女子500メートル決勝では、金メダルを獲得した日本の小平 奈緒選手が、レース後、涙を流すライバル・韓国のイ・サンファ選手をたたえる姿が話題になりました。



日本で行われた冬季大会に目を向けると、長野1998大会のスキージャンプラージヒル団体で、日本は1回目のジャンプで4位と出遅れてしまいま

した。しかし、悪天候による中断を経て、日本勢は4人全員がK点越えのジャンプを成功させ、大逆転で金メダルを獲得しました。

また、札幌で開催された1972年大会のスキージャンプ70m級で、日本の三選手が金・銀・銅メダルを獲得し、冬季大会で初めて表彰台を独占しました。これをきっかけに、日本のスキージャンプチームは「日の丸飛行隊」と呼ばれるようになりました。



形のあるものをもたらすだけでなく、私たちの心に感動を呼び起こしてくれるものがオリンピック・パラリンピックなのです。